ある学校の位替え王様ゲーム

スイマーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある学校の位替え王様ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ０６５１Ｐ

【作者名】
スイマーさん

【あらすじ】
どこにでもある市立中学校。
別にこれといった噂は無く、ごく普通の学校。
だが、外見は良くても中身は黒が圧倒的に白に勝っているような複雑過ぎる社会。

この中学にも春が訪れ、
主人公「天野　麻理乃」は中学三年生となり、本人にとっては去年のクラスは楽しい思い出がなく、

中学最後の年はせめていい思い出を残せるクラスに巡り会いたいと期待と不安の気持ちでいっぱいだった。

だが中学最後の年は天野　麻理乃だけではなく天野　麻理乃と同じ中学の同級生に夢の様で地獄を体験する不可解な出来事が起きる。

始業式（クラス替え）

この物語はフィクションです。
ですが登場人物は中学時代の同級生を少しモチーフにして作りました。
その他にも自分の中学時代を背景に混ぜている部分もあります。

この物語は地味にファンタジーで中学校特有の裏社会などを背景として描いてあります。
この物語の主人公は一応「天野　麻理乃」に設定していますが、別の人物の角度から見た視点で描いている所もあるので、そこはご了承ください。

最初の話は平凡な感じですが、途中で何らかの能力を一つそれぞれ持ち、そこから次々起こる出来事や謎の命令をクリアしていくという感じで進みます。

初めて小説を書くので誤字や脱字、駄目文はかなりあると思うので、つまらなかったらすみません。

始業式

どこにでもあるごく普通の市立中学校。

授業を受けて放課に友達とお話したりお昼のランチを一緒に食べたりして、

部活に入ってる人は部活動にはげみ、部活に入ってない人や部活をサボっている人は家に帰って過ごす。

外からじゃそんな風に見える。

もちろん、そんな感じに中学校は過ごす。

しかし、

外からだけじゃ分からない黒く長い中学校生活…。

「今までのクラスはつまらなかったなぁ…」

「特に去年は…。」

私は今日から中学三年になる天野　麻理乃

私の中学は母校の大山小学校と別区域の江原小学校の生徒が同じ中学に入学して構成している。

中学一年は余り記憶がないけど、

中学二年になるとグループがきっぱり別れていて、

自分は地味なグループにいた。

でも、自分は目立つ事が好きではなく、気楽に話せる友達がいるだけで十分だった。
友達も私と同じ事を思ってる。

なのに自分は上等な権利を持っている存在と思ってるのか、
自分より断然以下と思った奴を冷たい感じで見たり扱ったり、
挙げ句の果てに、周りを使って精神的に傷つける事をする。

そんな事がどこの中学でも常識的にあると思うと、
絶対回避できない道を進められている様な感じで、早くこの中学校から卒業したくなる。

今日から始業式だというのに…。

クラス発表の後に…

そろそろ校門に着いちゃうな…。

校門の側に友達が待っていて、私に気づいたのか安心したような表情をしていた。

「マリ、おはよう」

この女の子は波野里沙子という名前で、気が弱いが優しい性格の持ち主で将来絶対いい奥さんになると私は思う。

だけどありえないことに彼氏がいる。

こっちの中学ではカップルがほとんどいない。

カップルがうまれても、すぐに別れてしまう。

そんなどうでもいい事を思いながら学校の体育館の中に入った。

久々の学校はやっぱり緊張するな〜…。

私は人混みを避けて、里沙と一緒にクラス発表時間まで待った。

「はーーい！クラス発表の時間です！自分のクラスが分かったら、組が書かれているプレートの前に、番号順で座ってください！」

体育系の先生の大きな声が体育館に響くと同時に他の先生達がクラス表にかぶっている布を一斉に取った。

皆はすぐさま自分のクラスを探しに行った。

私も去年の惨めな思い出しかないクラスから、
やっとあのクラスから逃げれる気持ちがいっぱいで、
里沙をおいて自分のクラスを探しに行った。

すると教頭先生が何やら深刻そうな顔で生徒皆に言った。
「今年の三年生はある特別な事に協力してもらいます。
自分のクラスメートを覚えておきなさい。
後にこの事は重要になるだろう。」

そう言うと体育館内にいた先生達が一斉に外へ出た。

特別な事って何だろう…？

教頭先生の顔が考えられないくらい深刻な顔だった。

作り笑いかもしれないけど、いつも笑っていて怒った顔やマジな顔は生徒皆、一度も見たことがない。

私以外に同じ事を考えている人はやっぱりいた。

そんな時、
何十人かの全身黒と白で統一した姿の男達が体育館内に入り、私達の前に横一列で並んだ。

「何なんだ…あいつら」

「なんか事件でも起きたの？」

体育館内の生徒達はざわめいた。

「静かに！君達は国から、いや…世界から重大な任務を任された。是非とも協力してもらう。」

と、高価な服を着ている一人の男が舞台裏から出て来て、生徒達に話した。

「えっ、何なの？重大な任務って…」

「わかんないけど、世界が任すほどの任務って、相当スケールでかそ～」

そこでこの中学で三番目に値する問題児の田倉　雄太がいかにもガキ大将的な大きな声で舞台に立つ男に質問した。

「何で世界からこの中学校に重大な任務を任したんですか？」

「それは秘密だ。」

「んじゃ、世界が任すほどの重大任務って何ですか！」

「それは今から簡単に説明する。」

研究材料

「今日から君達は重要な研究材料になる。」

「研究材料…！？」

「研究材料といっても、人体実験を行うわけではない。」

そう言うと舞台下で並んでいた黒と白の男達が、
私達の周りを囲むように並び始めた。

それを見て、これから何か嫌な事が起きる予感がした。

「済まないが、もう説明する時間はない。
これから君達に起きる出来事は夢ではなく現実に起きている。

君達以外にいる人物は、
この学校の一年生と二年生だけはいるがそれ以外は誰もいない。」

皆は急な展開に驚きを隠せず周りに聞く行為をしている。

そこにまた田倉が焦った口調で質問をした。

「何で先生達はいないんですか？

あとその任務は今日だけですか？」

「それは分からない。
君達次第だ。
だが今日だけではない。
何ヶ月かは経つ。」

その言葉を聞いた皆は、
不安が隠せなくなったのか、周りの友達と不安そうに自分達がどうなるか話している。

その時、
時計の針が9時をさした。
9時になった事を確認した男は生徒皆に少し早口調で最後の言葉を残した。

「君達は世界から選ばれた者達だ。
任務に成功したら、君達は世界から偉大な人物として知られるだろう。」

「偉大って…！だからどんな任務なんだよ！」
話が大きくてよく分からない事に苛立ちをさした生徒達に愚痴をこぼす人もいた。

「任務成功…を…祈る…」

んっ、なんか言葉が聞きづらい…

なっ、何なんだろう…

意識が遠のいていく…。

私だけかな…

意識が遠のいていく感じの中、

周りを見ると私以外にも気分悪そうになっている人が何人かいた。

「あと…命…令は…絶…従…う…よう…」

「えっ今、何て…？」

「従…いと…命…とす…ぞ…」

音も聞きづらい…視界も暗い…

た…助け…。

「恨……め……前ら……」

「だか…ら…何…て言って…るの…？」

「それでは…アディ…オス……」

「プチ……」

任務（位替えゲーム）前日

「……」

「う……うぅ……」

あれ、私は何をしてるんだろう…。

私はハッと前に起きた事を思い出して目を覚ました。

ここは…、教室…？

本当にここが教室なのか周りを見渡してみた。

周りには縦列６席・横列６席で私を含めた生徒達が座っていた。

私以外にも先に起きていた人もいたが、

その人も私と同じくここが教室なのか周りを見ていた。

しかしその人も私と同じ何か違う事に気づいた。

おそらく、

この部屋は私達の学校の教室だと思うのだけれど、

おかしな事にどこの学校にもあるチョークが無く、代わりにナイフとフォークが置いてあるのと、

鉄で作られたような頑丈にできた壁と床に変わっているのと、

全部の窓に生徒の力ではビクともしなさそうな鉄骨がつけられていた。

「何ここ…！？」

その声が後ろから聞こえて、
私はハッと我に戻って他にも誰か目を覚ましたのかと思い、後ろを振り向いた。

そこには唖然としている川野さんが廊下側の一番後ろの席に座っていた。

彼女の驚いた声に、
他の人達が目を覚まし始めた。

「なっ、何だここは！？」
「ここ、どこの教室…？」
「始業式から何が起きたんだ…！？」

一人の声にたくさんの人が目を覚まし、
教室が疑問の声で騒がしくなった。

その時、
黒板の上に設置されているスピーカーから電源を入れたと思われる音が聞こえた。

「ブィィ…ン」

「3学年のクラス全員が目を覚ましたので今から任務を始めます。」

その声は女性アナウンスのようで、
どこか冷酷で人間の声ではなく機会で作られたような声がスピーカーを通して聞こえた。

「まず、机の中に一枚の紙が入れてあります。
それは自分以外の人には絶対に見せてはいけません。
後に自分自身を苦しめる結果になるでしょう。」

その話しを聞くと、
本当に自分を苦しめる事になるような気がした。

「その忠告を守って机の中に入っている紙を見て下さい。」

皆は机の中に紙がある事を確認すると、
二枚折りにされた白い紙をひらいて、
周りに見えないように体をうずくまりながら見た。

私も周りから見えないように腕で視界を遮る壁をつくって、
二枚折りの紙をひらいた。

「えっ、何これ…！？」

思わず声が口からでてしまった。

その紙には想像もつかない文が書かれていた。

「2番　天野　麻理乃（国民）」

キーワード…「の」

あなただけの秘密
「恨みは増せば増すほどレベルが上がる」

んっ、まだ読んでなかった文が一番下に書いてある。

「あなたの能力…
あなたは、（ねぇ天野さん…？）」

えっ…、読んでる途中に左斜め前から声がして、
すぐにその方へ向いた。

呼んだのは樹桃　二香さんだった。

「この紙って本当に誰にも喋っちゃいけないのかな～…？」

あまり話した事のない人だから、
どう答えた方が相手のためになるのか考えていると、隣に座っていた国瀬さんが答えた。

「二香～！多分だけど、まだ言わないほうがいいって！」

それを笑顔で言う国瀬さん。

樹桃さんはその言葉に安心したのか、
その他にも国瀬さんを頼るように次から次へと質問した。

この時私は、
何故か寂しい気持ちになった。

前にもこんな感じに自分が輪から外れていく事が何度かあった事を
思い出した。

自分も不可解な任務をやらされて不安なのに、
周りを見ると話せる女子がいなかった。

この先不安な状況にも関わらず、
新しいクラスで今年一緒に学校生徒を送るための友達作りを始めた。

「１０時になりました。
今からルール説明をします。」

さっきまで友達作りに励んでいた人達は、
放送が流れた途端にピタッとお喋りを止めて、
放送の方に集中した。

「まず紙に書いてあるように、
あなた方は明日から自分に与えられた能力を使う事ができます。

その与えられた能力で、
明日から何時間おきに起こるイベントに参加してもらいます。

イベント内容は様々で、

短時間で終わるイベントと、
長時間で終わるイベントがあります。

イベントは強制参加なので、
あるイベントで負けたり参加しなかった場合は、
その時に罰を下します。」

「はぁ、意味分かんねぇ！！二次元の世界じゃ、あるまいし！！」
問題児として先生によく注目されている蔵田君が、
放送が流れているスピーカーに向かって叫んだ。

「あと白い紙に書かれているキーワードやその人だけの秘密を集めるには、
盗むか相手を倒すかで紙を奪います。

全部のキーワードが分かったら、
その人はこの任務を成功した事になります。

しかし成功人数は一人ではなく生きている人も、
成功しなければなりません。」

さっきから命に関わる事のように聞こえる。

クラスの皆も不安な表情をしている。

「それと、

この任務は別名、
位替えゲームともいいます。

紙に自分の名前の隣に、
国民・兵士・大臣・執事・王様ｏｒ王女様
の、いずれかの位名が一つ書いてあります。

国民が兵士を倒したならば位が反対になり、
国民は兵士に、兵士は国民になります。

でも、兵士が国民を倒しても位は兵士の方が高いので、
兵士のままです。

位はランダムで決めていますので、
王様ｏｒ王女様に選ばれた人は特別という訳ではありません。

これで一通りの説明を終わります。

その他にも知りたい事があるのなら、
誰かを倒して白い紙を入手していけば、
知りたかった情報を知ることができるかもしれません。

ゲームは明日の９時から始まりますので、
今日はゆっくりとお休み下さい。」

「ブチッ…」

何で最後は任務ではなくゲームになってたんだろう。

「はぁ、マジ意味分かんねぇし！！」

「ウチらどうなるの…？」

「能力が使えるとか、人を殺すとか…、
誰かこの任務の事知らないの！？」

放送が終わってから数秒後、
長く続いていた沈黙が、
これから不可解な事が起きるのではないかという不安と恐怖で今まで以上に騒がしくなった。

私も現実ではありえないことを、
強制的に肯定されているような思いだった。

王女様救出ゲーム　？

「わ、分からないけど言わないほうがいいんじゃないかな…。」

小学校は同じだったけど、関わりはあまりなかったから、ぎこちない言い方になった。

「俺、力を倍増する能力だって～！」

あの体育館で質問をしていた男子が周りに聞こえるように喋った。

周りの皆は気にもせずに自分の紙を不自然そうに見ていた。

「ある王女様が何物かにさらわれました。

助けた人には自分の位が王に替わります。」

そう言って話しは終わった。

「王女様！？そんな奴がこの学校のどこかにいるのか？」

皆は驚いているが好奇心なのか、ほとんどのクラスメイトが王女様を探しに行った。

私もイベント企画みたいな事に参加してるみたいだったから探しに行こうとしたが、
さっき見忘れがあった白い紙が手元から消えていた。

床に落としたと思い、自分の周りの床を探した。

しかし周りを探しても見つからなかった。

どうしよう…。

とても大切な物を無くしたような気持ちだった。

「うっ、うわっ！！！」

一人の男子が叫んで周りの数人は驚いた声と悲鳴をあげている。

そこには石崎　達夢の隠し持ってきた３０？ぐらいのロボットが自発的に動いていた。

しかもそのロボットは石崎の前に立ち、
いかにも命令を下してほしいと言っているかのようだった。

その自発的に動いたロボットに石崎は顔が真っ赤になるほど興奮していた。

「ぼっ、僕の○○○ロボットが動いた！！！」

「それ、自発的に動くロボットだったんじゃね？」

その動くロボットを見ていた里中は馬鹿にするような口調で言った。

「ぼ、僕の夢が叶った！！！」

「はぁ？だからただ自発的に動く事を知らなかっただけだろ！？」

「動かな…『まず、お前んなロボット学校に持って来てたんかよ！馬鹿じゃねぇ？』」

「うっ…、」

「やっぱりいつも持ってきてたんだな！
そんな趣味悪いロボット持ってくるとか、
どんだけ気持ち悪いだよお前！！」

「へっ？
今、このロボットの悪口を言ったよね？」

さっきまで興奮していた石崎が急に凍りついたような表情に変わり、
石崎とロボットに暴言をはいた里中の元へ歩きだす。

「何だ？
ケンカでもしようってか？」

「あや……れ」

「？」

「あや…ま…れ」

「はぁ？
ちゃんと言えよ気持ち悪いなぁ！！」

「あや…まれ」

「はぁ？」

「僕のロボットに謝れ！！！！！」

その怒鳴り声は隣のクラスまで聞こえそうなでかさだった。

その怒鳴り声に里中は一瞬驚いたが、
すぐに対抗するため里中も石崎に向かって挑発的な言葉を怒鳴りつけた。

しかし石崎はその怒鳴りが耳に入らなかったようで自分のロボットの方へ向かい、憎しみを持ったような目で里中を睨みつけてこう言った。

「お前なんか死んじまえ！！！
僕の命令でこのロボットがお前を殺してやる！！！」

「はぁ？お前マジでクソ以下の野郎だ…な……」

急に言葉の勢いが無くなった思い里中の方を見ると、
里中の足から血が流れていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0651p/

ある学校の位替え王様ゲーム

2010年12月30日22時33分発行